Kappa Novels

この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙にはご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽二
光文社
神吉晴夫

長編小説　夜の配当

昭和38年2月25日　初版発行
昭和41年8月5日　51版発行

検印廃止　¥400

著者　梶山季之（かじやま ゆき）
東京都渋谷区渋谷4—3—27
青山コーポラス807号

発行者　神吉晴夫

印刷者　堀内文治郎
東京都千代田区神田三崎町2
堀内印刷

発行所　東京都文京区音羽2　株式会社　光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（関川製本）
表紙の模様・意匠登録　116613
© Tosiyuki Kaziyama 1963

長編小説

夜の配当

梶山季之（かじやまとしゆき）

カッパ・ノベルス

目次

首飾り……五
夢の合成繊維……三六
商標権……六三
一丁目一番地……八六
美女斡旋業……一〇四
尻をまくる……一二五
トリック鏡……一四六
固めの杯……一七六
二十八の瞳……二〇八
秘密クラブ……二三八
腹上死……二六一
一匹狼……二八三
あとがき……三〇五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

写真・杉山昭雄

首飾り

1

……その年も、終戦記念日は暑かった。

風がないせいか、大手町界隈は、とくに暑さが厳しい。ビルの中は冷房が利いているのでしのぎやすいが、窓の外に目をやると、にわかに瞼や、頸のあたりが、熱っぽく感じられるような——そんな暑さである。

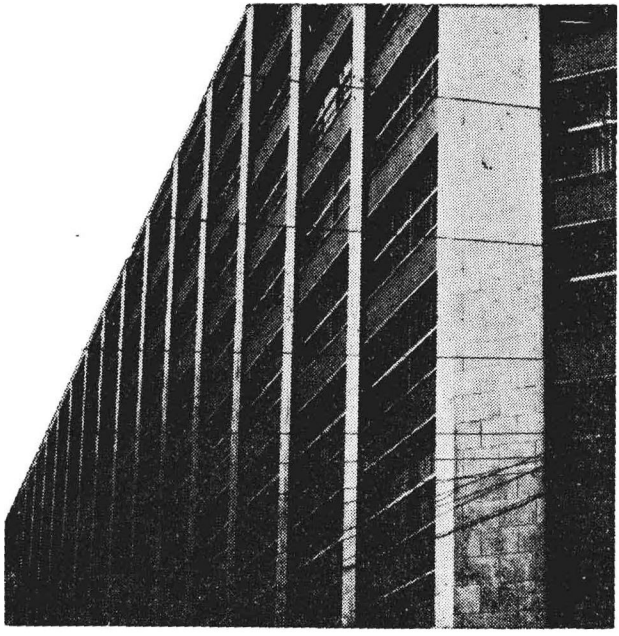
空気は異常に乾燥し、例によって水飢饉がニュースの話題となっていた。

「世界レーション」は、そんな暑さにうだっている大手町の、マンモス・ビルの五階から七階を占領している。そして企画部は、七階にあった。

——その日、企画部員の伊夫伎亮吉は、午前中から仕事もせずに、自分の机の中の、私物の整理に熱中していた。

足もとに大きなクズ籠と、旅行用の小さなバッグを置いて、不要なものはクズ籠へ、必要なもの

はバッグにしまいこんでいる。
〈どうしたんだろう？〉
〈気分転換を狙ってるのかな？〉
そんな彼の行動をみて、周囲にいる同僚たちは、みんな不審そうな顔はしたが、だれもその理由を、本人に直接きこうとしなかった。
まさか亮吉が、その八月十五日限りで、会社を辞める肚だとは、考え及びもしなかったからだ。
企画部員は、七十二名いた。そして部は、商品開発、市場、販売、宣伝、総務の五課にわかれている。
伊夫伎亮吉は、この企画部の中では、最古参であった。宣伝課長の赤松よりも古く、勤務年数からいうと、企画部のヌシのような、いわばベテランの企画マンである。
サラリーマンとしての経歴も、今年で十三年目になるはずであった。ただ、大学中退という学歴のため、三十五歳という年齢のわりには、社内でも出世が遅れている。
けっして陰気な性格ではないが、なぜか「拗ね者」のような感じがつきまとうのは、こうした彼の、遅れている出世のせいかもしれなかった。
背の高い、筋肉質な体格をもった人物である。その人物が、カバンも持たずに手ぶらで出勤してくると、なにか企画部の部屋の中に、異質なものが混じったような、そんな空気に一変する。
いつも風に吹かれて、飄々としているような亮吉の生活態度は、やはりサラリーマンとしては



大手町にあるマンモス・ビル

異質なものなのだった。女子社員たちも、独身の彼に、ある種の好意を寄せながら、なんとなく近づけないでいる。

けむたがるとか、怖がるというのではなくて、容易に人を近寄らせない、妙に厳しいものが、伊夫伎亮吉にはあるのだった。

髭が濃いので、いつも剃刀を当てている。短く刈り上げた髪の毛にも、ちゃんと櫛の目がはいっている。服装もきちんとしていた。

だから初対面の人ならば、彼がこの年齢になるまで、アパートで独り暮らしをしているとは、だれしも想像できなかった。だが、未婚の独身者だというのは、事実な

のである。
部長席の背後の壁にある電気時計が、午後二時を示したころである。
部長となにかを話しあっていた宿谷総務課長が、せかせかした足どりで、伊夫伎の机に近づいてきた。そして大きな声で、
「伊夫伎君、ちょっと！」
と呼んだ。
宿谷は、むっとした顔つきで、口をへの字に結んでいる。あきらかに不機嫌なときの、課長の表情である。
「はあ……」
書類を紐でゆわえながら、亮吉は、曖昧な返事をして課長を見つめた。
「第五応接室へ、すぐ来てくれたまえ！」
「はあ……」
「すぐにだよ！」
宿谷は背中をみせると、あわただしく廊下へと姿を消して行った。その課長の態度には、ある種の心の動揺が、にじみ出ているのだ。
それを見送って、伊夫伎亮吉は、うすい上唇をちょっと歪めた。そして目を伏せると、苦笑しながら心につぶやいた——。

〈ほう。とうとう、暴露よったか！〉

亮吉は、のろのろと立ち上がり、窓ぎわの洋服かけから自分の上着を手にとった。そしてゆっくり企画部室を出て行った。

東洋一の規模をもった、航空母艦のような巨大なビルだから、廊下がまっすぐ、どこまでも続いている。世界レーヨンでは、外部からの来客が、迷い子にならないようにと、その廊下の絨毯の色を、部によって変えていた。

企画部のモス・グリーンの絨毯が切れ、販売部の赤い絨毯がはじまる、ちょうどさかい目に、来客用の応接室が、大小とりまぜて八つばかり並んでいる。

第五応接室は、ときどき会議にも利用される、十坪ぐらいの広い部屋であった。白い布のかかった大きなテーブルと、背の高い椅子が並んでいるだけで、しごく殺風景な場所でもある。

伊夫伎亮吉は、応接室の前で、上着に腕を通し、きちんと身づくろいしてから、中へはいって行った。

部屋の中には、人事部長の上月もいた。

宿谷課長は、すわりもせずに、いらいらした表情で、立ったまま彼を迎え入れた。

「なにか、ご用でしょうか……」

亮吉は生真面目な顔で、二人の上司を見比べてみせた。宿谷は、自分の感情の昂ぶりを、もう押さえ切れないといった格好で、かみつくように叫んだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

「伊夫伎君！」
「はあ……」
「き、きみは、会社を辞めるというのは、ほ、本当か！」
「はあ、ほんまだす」
「……」
「上月部長の手許へ、辞表を届けてあるはずですわ」
「辞表を届ける、届けないじゃない！　なぜ、ひとこと、この僕に相談せん！」
「はあ？」
「課長である僕に相談して、それから辞表を出したって、遅くはないだろうが！　ええ？　そ、それをいきなり……」
宿谷は、まるで亮吉のとった行為が、自分に対する裏切りでもあるかのような、そんな詰じるような口調である。亮吉は、微笑していた。
「はあ、相談しようかと思いましたんやけど、私個人のことですさかいに、社員の服務規定に従って、人事部長に直接、お渡ししたんだすわ」
「きみ、きみ！」
課長はいきり立った。
「なるほど、会社を辞める、辞めんはきみ個人の問題だ。……しかし、僕は、かりにも君の上司だ

よ？」
「はあ、わかってます」
「なぜ僕に、直接、言ってくれんのだ？」
「服務規定には、辞表は人事部長が受理するものとする、とあって、上司の手を経て提出しろとは書いてまへん」
「しかし、きみ！　そ、そんなことは、サラリーマンの常識じゃないか！　何年、世界レーヨンに勤めてるんだい！」
「へえ、十三年だす……」
「な、なんだと……」
上月人事部長は、課長の宿谷をなだめるように、骨ばった手をふって、ひとまず二人を椅子にすわらせた。
宿谷としては、部下の伊夫伎亮吉が、一言の断わりもなしに、辞表を提出したことをむくれているのである。
しかもその辞表は、二十日あまりも前に、人事部長に提出されていたというのだから、課長の彼がおどろくのも無理はなかった。そして人事部としては、当然、企画部の総務課長が、伊夫伎亮吉の依願退職を了承（りょうしょう）しているものと思い、そのような手続きをとったのである。
企画部長は、退職金を支払う伝票が回ってきて、はじめてその事実を知ったのだった。

依願退職というのは、社員の自由意志で決められることだ。
なにも、上司の部課長の許可や、承諾の印鑑は要らない。人事部長の受理印と、社長の決済印とで、自動的に退職金その他の計算がなされ、給料日である十五日に支払いがなされるのである。
「伊夫伎君……」
人事部長は、煙草の火をもみ消しながら、小さなゲップを繰り返した。
「はい、部長……」
部長は、会計から借りてきたらしい帳簿を手にとって、ページをゆっくり繰った。
「私は宿谷君が、もちろん承諾しているものだとばかり、思っていたよ……」
「そうですか？」
「どうして、辞める気になったんだね？」
上月部長の口調にも、なんとなく不服そうなものが、こめられているのであった。
——社歴十三年。月給四万九千五百円。ボーナスは年二回の支給で、平均二十五割はもらっている。
〈いったい、なんの不平があるのだ？〉
と、人事部長は言いたげであった。しかし亮吉の決意は、ゆるがないのである。
「どうしても、辞めるのかい？」
「はい、辞めさせていただきます」

彼は、軽く一礼した。
「そのう……なんだ、辞めたい動機というか、理由はなんだい？」
宿谷課長は、くいつきそうな顔つきである。伊夫伎亮吉は、ちょっと首をかしげ、それから微笑した。
「さあ……なんだっしゃろな」
「冗談じゃないぞ、伊夫伎君！」
「へえ、本気で辞めるんだす」
「バカ！　なにが不服なんだ。来年は係長のポストが予定されている君が、だ、三十五にもなって、なんでっしゃろな、というような漠然とした理由で、辞表を出すはずがない！」
「……」
「そうでしょう、部長——」
上月部長もうなずいた。うなずきながら、この胃弱な人事部長も、〈どうにも合点ゆかない……〉という表情で、軽いゲップを繰り返している。
当惑したように亮吉は、また微笑した。
「ほんまだす。別に動機は、ないんだす。ただ、なんとなく、その……」
そのそらとぼけたような彼の言葉をきくと、宿谷課長の日焼けした黒い額に、太く青筋が浮き出てきた。

2

「わかった、伊夫伎君！」
宿谷は、猛獣のように吼えて、テーブルを拳で叩いた。
「きみはやっぱり、どこかの会社から、引き抜かれているんだ！」
「……」
「相手はどこだ？　〈帝国ナイロン〉か！」
「……」
「引き抜きは今、流行している。きみのような立派なキャリアなら、どこの会社だって、目をつける！　企画マンとして経験も豊かだし、すぐれた企画力も持っている……」
「おほめにあずかりまして、どうも——」
亮吉は、一礼した。
「仕事にも、脂が乗りきってるし、明日からでも、すぐ使えるからなア」
人事部長が相鎚を打つと、宿谷は、テーブルの上に体を乗り出すようにして、突き刺すように睨んだ。
「伊夫伎君！　教えてくれ。どこの会社から引っぱられてるんだ？　世界レーヨンでは、不満なの

か？」

この春に、課長に就任したばかりの宿谷にしてみれば、自分の保身のためにも、ベテラン課員の彼を手放したくない心境なのであった。なにかにつけて、部内に敵は多いからである。

「不満は、ありまへんわ。ただ、サラリーマンが嫌になっただけだす」

亮吉は、課長の黒い顔を眺めながら、つまらなさそうに答えた。

「サラリーマンが、嫌になったって？」

「はあ、そうだす。強いて、原因を捜せと言うんやったら、毎日、満員の国電にゆられて、会社とアパートとを往復するのんが、アホらしゅうなってきた、いうことでっしゃろか——」

人事部長は、〈ほう！〉という表情をした。

課長は、ポカンと口をあけて、亮吉を見つめている。なんどか彼の言葉を、心の中でつぶやいてみて、はじめて、その重大な意味に気づいたような感じであった。

「サラリーマンが嫌になって、アホらしゅうなったのなら、仕方ないなア」

「そうでっしゃろ？　だから、辞表を出さしてもろうたんだすわ」

「しかし、辞めてその後は、どうする気だい？　明日から、困るじゃないか……」

宿谷課長の表情には、ようやく安堵めいた色が、にじみはじめていた。亮吉が、ライバル会社である「帝国ナイロン」に、引き抜かれたのではないと悟って、ほっと一安心した様子である。現金なものだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo